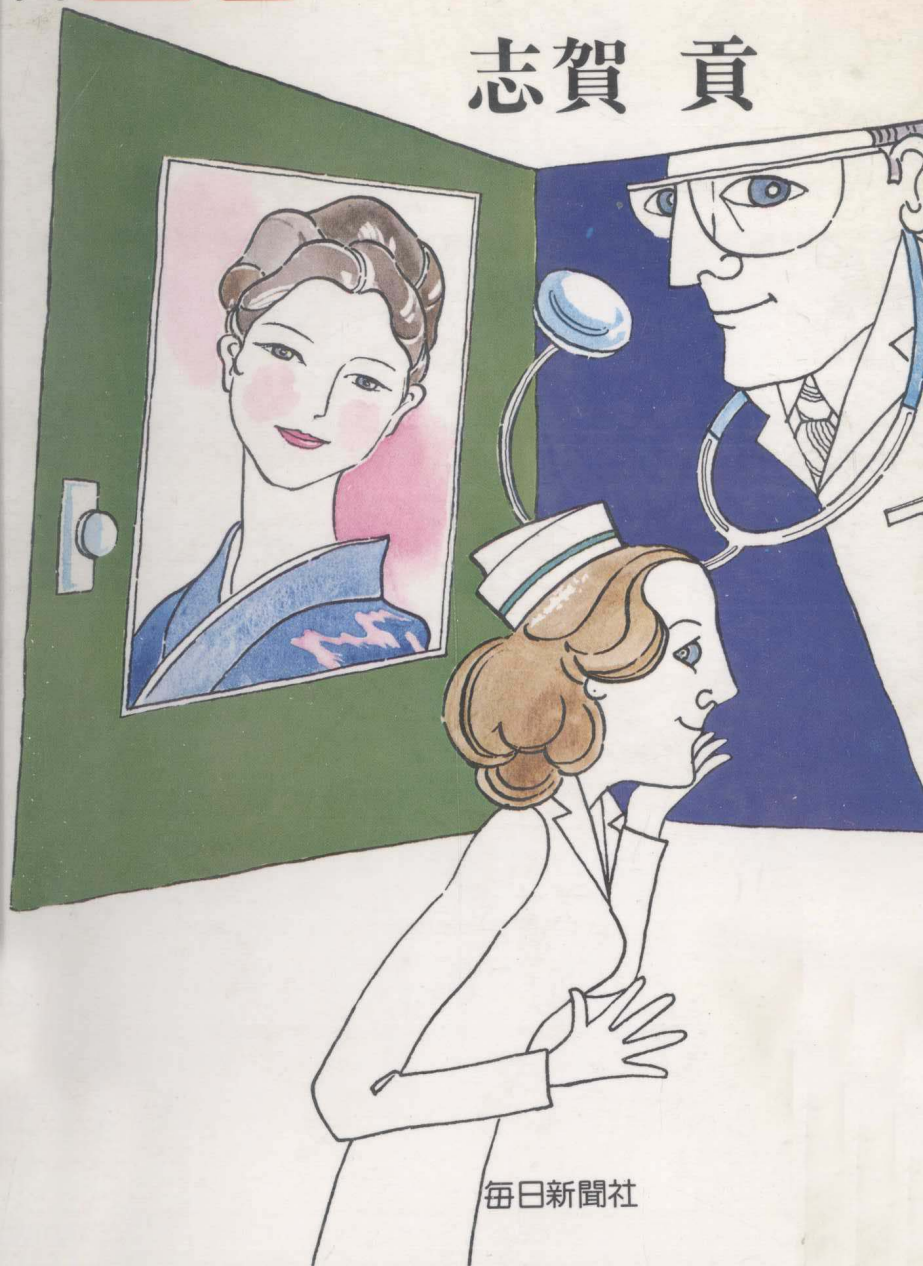
新医者のないしょ話

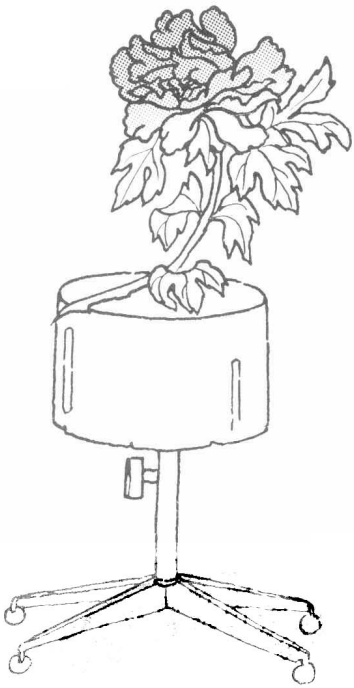
志賀 貢



毎日新聞社

新医者のないしょ話

志賀 貢



毎日新聞社

新 医者のないしょ話

昭和五十七年十一月二十日 印刷
昭和五十七年十二月五日 発行

著者 志賀 貢

編集人 森 啟二

発行人 関根 望

発行所 毎日新聞社

〒100東京都千代田区一ツ橋／〒530大阪市北区堂島／〒802北九州市小倉北区紺屋町／〒450名古屋市中村区名駅

印刷 図書印刷
製本 田中製本

定価 九八〇円

©志賀 貢 1982 Printed in Japan

新 医者のないしょ話

目次

ラブレター　七
荒療治　吾
別れのデート　八九
定期ドロ　一〇七
三つの部屋　一三八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

あこがれの女(ひと)　一六六
それぞれの病　一七七
豪傑娘　一九三
最後の艶歌　二一〇

装幀・イラスト　七崎　ゆき

新　医者のないしょ話

ラブレター

1

「この子ったら、乳房のことばかり気にするんです。まったく困っちゃいますよ」

といって、十七歳になったばかりの房ちゃんが母親に連れられて診察室にあらわれたのは、まだお正月のしめ飾りがとれないうちだった。

暮れのうちに、看護婦達が総出で飾りつけたこともあって、いつもは殺風景な診療所の中もなんとなく華やいでいた。

房ちゃんは絵絣の着物姿であらわれた。以前にも風邪をこじらせて、何度か治療に通ってきたことがあるのだが、彼女の着物姿を見るのは初めてであった。すごく大人びて見えた。

「どれどれ、診てみようね」
つとめて笑みを絶やさないようにしながら彼女の顔をのぞきこみ、それから、そっと視線をはずして彼女の頭越しに合図を送ると、介助についている外来主任の秋田さんが、サッと白いカーテンを引いた。診察室の中央を仕切って、医者と患者だけの狭い空間をつくるためのカーテンである。薄いカーテンではあるが、房ちゃんのような若い娘さんの羞恥心を取りさるためには、役に立つのだ。
これが、酒屋のおミネ婆さんやバー・リッペのママのように、しわしわの靴下みたいな物体が胸にぶら下がっているのなら、なにもカーテンなど引くことはないのだが、なにしろ、房ちゃんはまだ十七歳である。診察のためとはいえ、彼女のまぶたや唇に手を触れるのだって、私は気を使う。まして乳房を診るとなると大変だ。
「どうしたの。なにか気になるものでもできてるのかな」
房ちゃんは胸を診せることを覚悟してきたらしく、カーテンが引かれると、秋田主任にうながされるまますなおに着物を脱いだ。そして、私の問いに、房ちゃんは右の乳房にそっと手をあてた。
「どれ、どこなの」
その手を静かにとりのぞくと、代わって私の手が触れる。ふっくらとおわんを伏せたよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うな乳房は、うっすらと汗ばんでいた。かわいそうに緊張しているのだ。

「コリッ」

右の乳房の腋窩に近い上四半分に、小さいがかなり硬いしこりが触れた。その瞬間、房ちゃんの頬にぱっと紅が散った。いくら診察のためとはいえ、他人に乳房を蹂躙されるのは、房ちゃんにとって初めての経験に違いない。そう、それはまさしく蹂躙といってよいだろう。

「ちょっと、ベッドに寝てごらん」

「はい、右腕を上げて、手を頭の下にあてて」

あらわになった胸に、医者の手が情け容赦なく触れて行く。

「コリッ」

それにしても、とても気になるしこりの感

触であった。

最初、私は乳腺線維腺腫を疑った。若い女性に比較的多い良性腫瘍である。硬さといい、周辺組織との境界、腫瘍表面の状態といい、線維腺腫の特徴を、房ちゃんのしこりは持っていた。ただ、小さなしこりの割には、可動性に乏しいのが気になった。

診察の手を右の乳房から腋窩にすべらせると、房ちゃんのからだが一瞬硬直した。おそらくくすぐったいのであろう。彼女は歯をくいしばって、私の手に耐えている。腋窩のリンパ腺には別に異常はないようであった。

「先生、疲れで肩から胸の筋肉が凝ってるんじゃないんですかねえ」

診察が終わると、母親が、同意を求めるような目で私を見た。

「へえ、房ちゃん、なにかスポーツをやってるの」

「そうじゃないんですよ。この子、小さな時からお琴習ってるんです。それが、奥許しをいただいてからというもの、急に熱が入るようになりましてね、明けても暮れてもお琴ばかりひいているんですよ。学校の勉強なんかそっちのけなんですもの。あれじゃあ、胸の筋肉だって痛くなりますよ」

「ほう、房ちゃんはお琴をやってるの。しかし、奥許しとはすごいね。じゃ、もうすぐ名取りだね」

ベッドをおりて、はだけた胸元をなおしていた房ちゃんが、私の方をふりむくとにっこりと笑った。

「で、房ちゃんは何流かな」

「あら、先生、お琴に趣味がおありなんですか」

「いや、知人にお琴のお師匠さんがいるもんだから……」

「まあ、それじゃあ、お詳しいですよね、山田流なんですの」

無口な房ちゃんに代わって、母親がよく喋った。房ちゃんは、お琴に私が多少の関心を持っていることを知って親しみを覚えたのか、最初、診察椅子に腰をおろした時よりは、ずっとやわらいだ表情になった。

（十七歳といえば、高校二年生か）

そういえば、あの少女も今の房ちゃんの歳であった。房ちゃんを見ていると、三十年ほど前の札幌での下宿生活がなつかしく甦ってくるようだった。

佐美政おばさんは元気だろうか。中学三年のときから高校卒業まで四年間も生活を共にしていると、もう親子みたいなものである。いまでも、電話や手紙で時々連絡はとりあっているが、八十をとうに越した今も、家元のお琴のおさらいでは、若いお弟子さんには本手をひかせ、自分は替手をひくというから、たいしたものである。

当時、おばさんの家は水の公園として知られる中島公園の近くにあった。大変閑静な住宅地で、受験勉強には最適の下宿であった。私の部屋からは、中廊下をはさんで葡萄棚のある庭が見えた。

おばさんにはお琴のお弟子さんがいて、この私の勉強部屋がしばしばお稽古場になった。

「うるさいなあ、なんとかしてよ」

最初のうちは、私はよく顔をしかめたものだが、そのうちお琴の音色に拍子をあわせて、英語の辞書がひけるようになった。

ところが、どうにも勉強が手につかぬ弟子があらわれた。その子が房ちゃんと同い歳だった。私と同じ高校で一級下だった。すらりと伸びた肢体にふっくらと肉がついていて、そのうえ色が白くなかなかの美貌であった。彼女が、私の勉強机のすぐ横に坐ってお琴をひきはじめると、私の英語はメチャメチャになる。辞書など、なんど同じところを引かされたかわからない。

「まだ『六段』をやってんのか。覚えのわるい子だな」

しかし、彼女の頭の良し悪しなどどうでもよいことなのだ。彼女がちょっと腰を浮かせて糸を押そうものなら、私の腰も落ちつかなくなってしまう。彼女の方も多分に上級生である私を意識してか、しょっちゅう糸を間違える。ところが、そんなことには、おばさん

はおかまいなしである。

「ツルツルテン、ツルツルテン、イヤ、ツルツルテン、ヨーイ、……」

おばさんは、本手も替手も諳じていて、口と手で徹底的にしごく。かわいそうに、そのうち彼女の額には汗がにじみはじめる。私はひそかに、彼女を「六段の君」と呼んでいた。

このようなお稽古を、週のうち何度かそばで見ているうちに、私は『六段調』をすっかり覚えてしまった。おかげで、英語の単語はちっとも頭に入らず、今でも英語はにが手だ。そういえば、房ちゃんの顔立ちは、どことなく、六段の君に似ているのだ。

「房ちゃん、今度、『六段』をひいてきかせてくれないかなあ」

房ちゃんは恥ずかしそうに目を伏せると、秋田さんにうながされて、採血をするために処置室の方へ去った。

房ちゃんの姿が消えるのを待って、

「お母さん、大学病院で一度診てもらいましょうよ」

と、嫌な話をきりだした。母親の顔色が変わった。

「先生、なにか変な病気ですか」

「いやあ、若い女の子によくみられるただのしこりだと思うんだけれど、急に大きくなることもあるから、一応調べておいた方がいいと思ってね」

「本当にしこりがあったんですか。私はてっきり筋肉の痛みだとばっかり……」
「しこりはしこりなんだが、乳房のしこりって、女の子は気にするでしょう。それに、もし取った方がよい場合には、小さいうちの方がキズもあまり大きくしないですむしね」
「手術？」
母親の顔に不安が走った。これ以上の説明は無理のようであった。説得には相当骨が折れそうだと思ったが、私は診察机の引き出しから便箋をとりだすと、あとはだまって紹介状を書いた。

2

二週間ほどが過ぎた。往診の帰りに芳町検番のそばを通ると、二階のお稽古場で芸妓さん方がおさらいをしているのであろう、鼓や三味の音が聞こえてきた。私の脳裡に、お琴の曲『みだれ』の旋律が浮かんできた。
（おばさんの『みだれ』は天下一品だったなあ）
お弟子さんが帰ったあと、私はよくこの曲をおばさんにねだった。
「貢さんの好きなのは、このところなんでしょ」
と言って、あの激しい渓流を思わせる、曲のさわりの部分をひいてくれた。ごろりと横

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com